

Title	スティグマの社会心理学
Sub Title	Stigma : a social psychological approach
Author	三井, 宏隆(Mitsui, Hirotaka)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1985
Jtitle	哲學 No.81 (1985. 12) ,p.99- 120
JaLC DOI	
Abstract	In this paper, the phenomena of social stigma, particularly the interaction between physically disabled persons and the nondisabled, were discussed in terms of experimental studies. The, main point of the discussion is that stigma is seen as a product of definitional processes arising out of social interaction, and not as an attribute that people automatically have when they acquire a trait or quality that may be discrediting. That is, stigmatization is regarded as a process in which particular social meanings come to be attached to categories of behavior and to individuals. The following things were found through the review of experimental studies which were conducted in different situations. (1) The reactions of the normals to the stigmatized are ambivalent. They can be either hostile and rejecting or sympathetic and helpful, depending on the circumstances of contact. (2) Physically disabled persons not only have the problems of coping with their physical handicaps, but are likely to experience social handicaps as well. One social handicap disabled persons face is that, in initial encounters, nondisabled persons tend to avoid social interaction with them. In this situation, one technique available to the disabled person is voluntarily to mention his handicap.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-0000081-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

スティグマの社会心理学

三 井 宏 隆*

Stigma : A social psychological approach

Hiroataka Mitsui

In this paper, the phenomena of social stigma, particularly the interaction between physically disabled persons and the non-disabled, were discussed in terms of experimental studies. The main point of the discussion is that stigma is seen as a product of definitional processes arising out of social interaction, and not as an attribute that people automatically have when they acquire a trait or quality that may be discrediting. That is, stigmatization is regarded as a process in which particular social meanings come to be attached to categories of behavior and to individuals.

The following things were found through the review of experimental studies which were conducted in different situations.

- ① The reactions of the normals to the stigmatized are ambivalent. They can be either hostile and rejecting or sympathetic and helpful, depending on the circumstances of contact.
- ② Physically disabled persons not only have the problems of coping with their physical handicaps, but are likely to experience social handicaps as well. One social handicap disabled persons

(注) 本稿ではスティグマを負う人の一例として、身体的なハンディキャップをもつ人を考えている。また、一般の人びとは健常者のことである。

* 慶應義塾大学文学部助教授 (人間科学)

face is that, in initial encounters, nondisabled persons tend to avoid social interaction with them. In this situation, one technique available to the disabled person is voluntarily to mention his handicap.

問題提起

対人場面においては、他者（相手役）をどのような人物と認知するかということが、その後の相互作用の在り方に大きな影響を及ぼしてくる。

他者に対して好意的な感情をもつ場合と、否定的な感情をもつ場合とでは、その後の係わり方が異なることは我々が日常経験する所でもある。

ところで、こうした否定的な感情が特定の他者とか、特定の集団にだけ向けられる場合には、それは単なる個人の好き嫌いにとどまらず、偏見とか差別といった社会問題と結びつくことになる。

この点ではスティグマ (stigma) も同様である。スティグマという言葉の意味する所は必ずしも明確ではないが、Goffman, E. (1963) はそれを次のように説明する；スティグマという言葉を用いたのは、明らかに、視覚の鋭かったギリシャ人が最初であった。それは肉体上の徴をいい表わす言葉であり、その徴はつけている者の徳性上の状態にどこか異常なところ、悪いところのあることを人びとに告知するために考案されたものであった。徴は肉体に刻みつけられるか、焼きつけられて、その徴をつけた者は奴隸、犯罪者、謀叛人——すなわち、穢れた者、忌むべき者、避けられるべき者（とくに公けの場所では）であることを告知したのであった。のちにキリスト教の時代になって、2つの隠喩の層がこの言葉に加えられた。第1の層は皮膚に口をぱっくり開けた形をとって肉体に現われた聖寵の徴を意味していた。第2の層はこの宗教的隠喩への医学的言及で、身体上の異常の肉体的徴候を意味していた。今日ではこの言葉は、最初のギリシャ語の字義上の意味に似た意味で広く用いられているが、不面目を表わす肉

体上の徴ではなく、不面目自体をいい表わすのに使われている。さらにつけ加えるなら、関心をもたれる不面目の種類にも変化が生じてきている；(p. 9-10).

そして、彼はこうしたスティグマの付与に結びつく属性として、①身体的な欠陥 (bodily abominations), ②個人の性格に由来する汚点 (character blemishes), ③人種, 民族, 宗教などに係わる集団的スティグマ (tribal stigma), をあげている。

一方, Farina, Holland & King (1966) はスティグマを「そのことが明らかになれば, その人の信用を失墜させることになったり, 社会的地位を貶めることになるような属性」と定義した。しかしながら, Jones, Farina, Hastorf, Markus, Miller & Scott (1984) はスティグマという言葉には特別な意味あいがかめられていることを指摘し, マーク (mark) という言葉を採用するように提案した。彼等によれば, 「マークとは或る基準や典型例からの逸脱を示す状態ではあるが, それが直ちにスティグマと結びつくものではない」と説明されている。つまり, 特定の集団においては好ましいことではなくても, 社会全体として見れば望ましいとされるような逸脱も存在しうるわけである。

ところで, このスティグマの概念を拡大解釈していくと, 「背が低い」, 「字がへたである」, 「時間にルーズである」といったことまでもがその対象となり, 何人もスティグマの付与を免れえないことになる。すなわち, Goffman, E. が指摘したように, 「スティグマという言葉が問題となるのは, 属性そのものよりも, それを取りまく人間関係である」ということにならざるをえないのである。

本稿ではこの前提のもとに, 身体的ハンディキャップをもつ人 (physical stigma) と一般の人びと (the normals) との間で生じる相互作用の問題を取りあげることとする。具体的には社会心理学の分野で行われてきた研究例を紹介しながら, 両者の相互作用にまつわる問題点を明らかにしていく

ことにする。

スティグマが相互作用活動に及ぼす影響

実験室事態とは異なり、日常場面では対等な人間関係は長続きしないように思われる。何時の間にか、当事者の一方が優位の立場を得て、他方がそれに従うという関係になってしまうのが実状である。

こうした対人関係を招来する社会的要因の1つが心理的な負い目である。それは、①自らの行為が相手に及ぼした悪影響に由来するものであったり (guilt feelings), ②自らが相互作用場面に持込むネガティブな属性に原因があったりするけれども、スティグマを負った人びとの場合は後者にあたる。

Jones, Farina, Hastorf, Markus, Miller & Scott (1984) はスティグマをもつことが相互作用活動に及ぼす影響について、次の6つの側面(要因)から問題点を整理した。

① Concealability……それはどの程度他者の目に触れずに済ますことができるのか。

② Course……それは当人にとって一時的なものか、それとも一生つきまとうようなものか。

③ Disruptiveness……そのために他者との意思の疎通がうまくいかなかったり、相互作用が妨げられたりすることがあるのか。

④ Aesthetic qualities……そのことで他者がネガティブな感情をもったり、不快感を抱いたりするようなことがあるのか。

⑤ Origin……何が原因でそのようなことになったのか、責任は彼自身にあるのか。

⑥ Peril……そのために他者が危険を感じたり、係わり合いを避けるといった行動を示すことがあるのか。

無論、これらの要因が対人行動に及ぼす影響はそれぞれが独立ではなく、相互に関連しあっているのが実情である。また、一般の人びと (the normals) がスティグマを負う人との出会いにおいて示す反応はアンビバレントなものであると言われているが、具体的にはどのような行動となって現われるのであろうか。

この問題を取りあげたのが Kleck, Ono & Hastorf (1966) である。彼等は第2実験において、健常者が身障者から面接をうけるという状況を実験的に設定した。

Kleck, Ono & Hastorf の研究

スティグマをもつ人との相互作用において、人びとはそうした状況から早く逃れたいと思う一方で、彼等に対しては親切に行動しなければならないとする社会規範もまた無視することができない。このようなジレンマに直面した人びとは一体どのような行動を示すのであろうか。

(手続) 報酬が支払われるということで実験に参加した被験者 (40名の男子高校生) に対して、「この実験は対面状況におかれた人びとの生理的反応 (GSR) の研究である」との教示を与えた後で、彼等の腕に電極を貼付した。こうした状態でもう1人の実験参加者 (男性のサクラ) の到着を待つことにした (この間にGSRの基準値が測定された)。サクラの条件は、①何ら不自然な所がなく、歩いて入室してくる場合 (NH条件) と、②車椅子で入室してくる場合 (H条件) とが設定された。サクラにも同様に実験の説明をしたうえで電極を貼付し、改めて最初の課題を提示した。それは予め用意された25項目の質問のなかから、相手に対して質問したい項目を選び出すことであった (information seeking)。それから、どちらが面接者となるかを決定するためのくじ引きが行われた。その結果は常にサクラが面接者となった。サクラは実験者から手渡された質問リストに基づい

て、被験者に5項目の質問を実施した。このときの被験者の回答は1ヶ月後に改めて実験者によってチェックされた (opinion distortion の指標)。

(結果) サクラに関する条件操作は意図した効果をもち、誰一人として車椅子の使用に疑念を示さなかった。またGSRの変化をみるかぎり、H条件ではNH条件と比較して、GSRの値に有意な減少が見出された。これはH条件でのコンフリクト、ストレスを表わすものと解釈された。

相手方に尋ねたい質問項目に関しては、両条件間で項目数や項目内容に差異は見出されなかった。但し、H条件の方が質問項目の選択に長い時間を費していた。

一方、面接状況に関しては、H条件の被験者はNH条件と比較して面接を早く終了させていた。参考までにこうした傾向は、H条件のなかでも特に高い不安を示したグループ(9名)において強く見出された。またH条件の被験者の対応は柔軟性に乏しく、型にはまったものとなっており、質問に対するの回答も意識的に抑制されていたことを示していた(表1)。

表1. 平均面接時間と意見の歪曲の度合

	NH条件 (20名)	H条件 (20名) (overall)	H条件⑥ (9名) (uncomfortable)
面接時間 ^②	6.32	5.63	4.77
意見の歪曲度	2.65	4.25	5.29

②単位は分。⑥実験後の自己申告から、不安が高いと判断されたH条件のうちの9名分の集計結果。H条件に割りあてられた全員の結果はH条件(overall)と表示。

以上のことから、身体的ハンディキャップをもつ人が健常者を相手役として実施した面接においては、①被面接者が面接者に差し障りのある事柄への言及を意識的に避けようとするためか、ステレオタイプな対応になりやすいこと、②被面接者がこうした事態を早く終了させたいためか、回答も手短かなものとなりやすいこと、などが明らかされた。

Comer & Piliavin の研究

近年の相互作用行動に関する研究テーマの1つとして、非言語コミュニケーションへの関心があげられる。たとえば、「目も口ほどに物をいう」との言い回しがあるように、視線の動きや eye contact の回避などを通じて、その人の心の動揺や不安気な様子を察知することができる。無論、そこには思いすごしや見当違いもあるけれども、そうした非言語的な手掛りは相互作用場面における有力な情報源である。身体的ハンディキャップをもった人との相互作用において、この点に着目したのが Kleck, R (1968), Comer & Piliavin (1972) である。

ここでは、Kleck が、面接場面における健常者の側の反応を取りあげたのに対して、Comer & Piliavin はハンディキャップをもつ人にみられる反応を観察した。

(手続) 被験者はペンシルバニア大学付属病院及びリハビリセンターに入院している男性患者30名であった(内訳は手足を切断した患者12名、両足麻痺の患者10名、半身不随の患者8名)。彼等は「人びとは初対面の人との出会いにおいてどのような行動を示すか」というテーマの実験に参加するように求められた。実験者は車椅子の被験者を実験室まで案内していき、「あなたの知らない男の人(サクラ)が質問を読みあげ、それに回答することになる」と説明した後、サクラを呼びに部屋を出た。サクラの条件としては、①車椅子に座っている場面(Handicapped 条件)と、②椅子を手にして歩いてくる場面(Normal 条件)とが設定された。いずれの条件でもサクラが室内に所定の位置を占めた後、被験者が車椅子を動かして適当な対人距離を保つことにした。それからサクラは「第1問は自分自身を語るということです。ご自由に好きなだけお話し下さい。区切りがつかしました所で第2問に移ります」と説明した。この後、①友達の重要性、②人

生におけるスポーツの重要性, といったテーマのもとに引続き10項目の質問がなされた。さらに被験者は面接終了後に質問表を手渡され, 面接状況に対する反応を記述するようにと告げられた。

(結果) サクラは1人で Handicapped と Normal 条件の面接者の役割を演じ分けたけれども, その役割演技は大成功であった。また相互作用の結果は次の通りであった (表2)。

表2. 両条件における相互作用の結果

Confederate	Length of interaction (in minutes)	Motor score/ interaction length	Interpersonal distance (in inches)	Smiling time/interaction length	No. smiles/interaction length	% eye contact time
Normal	6.55	.093	67.5	.091	.028	13.2
Handicapped	9.56	.135	79.2	.098	.041	23.0
t 検定	2.83	2.64	3.67	<1	2.36	2.36
p	<.01	<.02	<.01	ns	<.05	<.05

Note. —N=15 in each condition.

Normal 条件に割りあてられた患者は Handicapped 条件の場合と比較して, ①面接をより早く終了させていたこと, ②面接中は身体をできるだけ動かさないようにしていたこと, ③笑いや eye contact も少なかったこと, ④面接をあまり好ましいものと感じていなかったこと, ⑤面接者との距離を大きくとっていたこと, ⑥受け答えも型にはまったものとなっていたこと, が明らかにされた。

以上のことから, 一般の人びとと身体的ハンディキャップをもつ人との相互作用場面においては, お互いが不安を感じており, 相手の行動を強く意識していることが示唆された。

Carver, Glass & Katz の研究

スティグマをもつ人に対する感情はアンビバレントなものであると言われているが、この点について、①スティグマを負う人とそうでない人が同じように社会的に望ましい特性を有しているとき、前者の方がよりポジティブに評価されること、②逆に両者が望ましくない特性を有しているときには、前者の方がよりネガティブに評価されることがある、との知見が報告されている (Dienstbier, 1970) . こうした現象は “positive prejudice” と呼ばれているが、Carver, Glass & Katz (1978) は黒人や身体的なハンディキャップをもった人たちに対する好意的な評価は、一般の人びとが社会的に望ましいとみなされている反応を意識的に採用した結果ではないかと考えた。

(手続) テキサス大学の女子学生 (90名) が被験者として「印象形成に関する実験」に参加した。彼女らはランダムに Bogus Pipeline 条件 (BPL) と Control 条件とに割りあてられた。

BPL 条件の被験者は微妙な感情の変化も立ち所に発見してしまうという装置を前にして、或る人物の面接記録を読んで、その印象をチェックするように求められた (たとえば、知的—知的でない、勤勉な—怠惰な)。

一方、Control 条件では同じ内容の面接記録を読んで、その人物の印象を通常の実験と同じやり方で記述するように求められた。両条件の相違点は、BPL 条件の被験者はより真実を語らざるをえない心境におかれるであろうということであった。ところで、この面接記録に提示された人物は、①黒人、②身体的ハンディキャップをもつ人、③白人で健常者、の3条件であった。

(注) Bogus pipeline についての説明は三井 (1985) を参照。

(結果) 従属変数は11項目からなる印象評価の合計点であった。分散分析の結果、印象評価の方法 (BPL と Control) と被面接者の属性との間に有意な交互作用が見出された。

すなわち、被面接者が黒人の場合、BPL条件の評価はControl条件と比較して有意にネガティブなものとなっていた。一方、ハンディキャップをもった人に対する評価は両条件を通じて好意的であった(図1)。

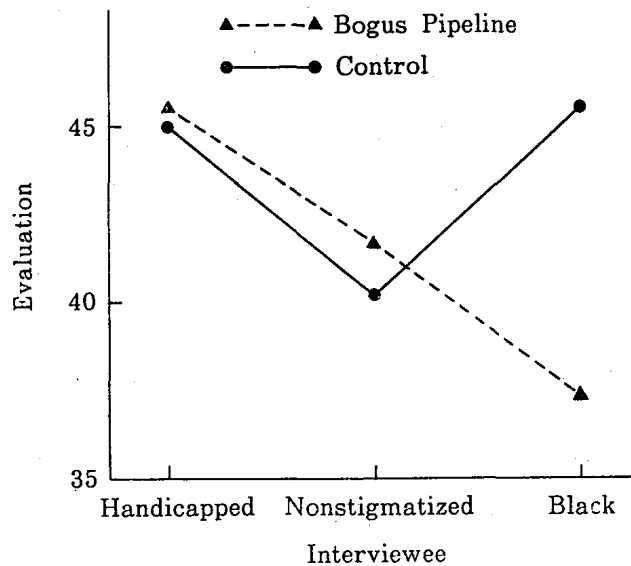


図1. 異なる方法に基づく印象評価の結果

以上の結果から、一般の人びとは黒人に対してネガティブな感情を抱いているけれども、それが調査などで明らかにされないのは「自分が偏見をもつ人間である」ことを認めたくないからであり、もしこうした自己欺瞞が許されない場合には(BPL条件)、本来のネガティブな感情が表面化すると結論された。一方、身体的なハンディキャップをもった人に対する評価が常にポジティブであったことについては、黒人に対する場合に比べてネガティブな感情の吐露が社会的に強く抑制されているためであると説明された。

社会的ハンディキャップとしてのスティグマ

Goffman, E. (1963) はスティグマを負わされた人びとが一般の人びとの相互作用において、まず学習すべき事柄として、①常人の視角を習得し、②その視角から見て、自分が失格していることを理解する、ことをあげている。そしてこの後には、③自分が正にその種の間人であることを知り、彼等の処遇の仕方に自らを適応させる、という段階がやってくる。

たとえば、Kleck & Strenta (1980) の一連の実験では、ネガティブな評価が伴う属性の持主（てんかん患者、顔に傷跡のある人）と信じ込まされた条件の被験者は、社会的な評価が曖昧な属性（アレルギー体質の人）条件と比較して、相手方の反応に過敏となっていることが明らかにされた。すなわち、①顔に傷跡のある人は相手の視線の動きが気になってしまうこと、②てんかん患者は相手が緊張していることや不安気な様子を逸早く察知してしまう、といった具合である。

このようにスティグマを負う人が神経過敏となっていることが予想されたり、下手に刺激したりするとどんなことがおきるか判らないという恐れがあると、一般の人びとはそうした係わり合いをできるだけ避けたいと思うようになる (Snyder, et al., 1979)。その結果、両者の心理的距離は一層拡大し、相互理解も難しくなる。こうした状況を打開する方策として提案されたのが、スティグマを負う人が自らのスティグマについて語ることであり、それによって一般の人びとの心配や不安を事前に解消することが狙いであった。

Farina, Sherman & Allen の研究

Farina, Sherman & Allen (1968) は精神障害者と身体障害者に対する場合とでは一般の人びとの反応が異なるとの立場から次の実験を行なった。

(手続) 男子大学生 (60名) が被験者となり、「未知の人同士での対人コミュニケーション」に関する実験に参加した。各被験者の相手役となるサクラ (男性) は、①車椅子の状態 (W条件) 或いは②多少足をひきずって歩く状態 (NW条件) で登場した。両者が予め用意されたテーマに基づいて情報を交換するなかで、(大学生活の問題点、自分の性格で嫌いな所など)、サクラは③自ら身体が不自由なことに言及する条件 (T条件) と④そのことはタブーであると思わせる条件 (NT条件) を導入した。次いで両者は別々の部屋に案内され、「一方が教師役となり、他方が生徒役となってパターン学習をするように」と告げられた。生徒役を割当てられたサクラの課題はA, B, Cの3つのスイッチを押しながら、隠されたパターン (A A B C A) を探し出すことであり、間違えるたびに罰として電気ショックが与えられることになっていた (30試行)。従属変数は電気ショックの強度とその持続時間であった。

(結果) 実験結果は次の通りである (表3)。電気ショックの強さ (intensity) に関しては条件間に有意差はみられなかったが、持続時間 (duration) については車椅子条件 (W-TとW-NT) の方が有意に短くなっていた。この差異は車椅子条件のサクラの方がより好意的に扱われたことを示すものと解釈された。但し、スティグマに言及するか否かの条件操作は電気ショックの実施に有意差をもたらさなかった。

表3. 電気ショックの平均強度と持続時間 (各条件群15名)

条 件 群	Intensity ②	Duration ③
W-T	4.8	86.2
W-NT	6.0	105.6
NW-T	5.1	149.5
NW-NT	4.9	135.1

②数値が大であれば、より強いショックを示す。③単位は1/100秒。

但し、その後の追試は必ずしもこの結果を支持するものではなかった。たとえば、次のような研究結果が報告されている。

Mills, Belgrave & Boyer の研究

Hastorf, Wildforfel & Cassman (1979) は大学生を被験者として、身体的なハンディキャップを負った人 (paraplegic) が登場する面接場面のビデオ・テープを2本ずつ見せたうえで、どちらの人と一緒に仕事をしたいかと質問した。

問題のテープは当該人物が自らのハンディキャップについて言及する条件と、言及しない条件から構成されていた。その結果は、進んで言及する条件の方が好意的な評価を得ていたことが明らかにされた。

同様の状況を実験室内での両者の相互作用として取りあげたのが Belgrave & Mills (1981), Mills, Belgrave & Boyer (1984) である。

(手続) 被験者は一般教養課程の女子学生であり、単位の一部として実験参加を要請された。実験室にやってくると、実験者は「もう1人の学生がきていないけれども、先に始めることにする」と告げたうえで、「本日の実験は作業課題に取りかかる前にしたことが、どのような影響を及ぼすかということであり、具体的にはポピュラー音楽を聴いたことと友人と話をしたことの影響が調査される」と実験事態を説明した。そして所定の12分間を好きなように配分し、用紙に記入することを依頼した。ところが実験者はその後で、「いま配った用紙は間違ったものである、本当は18分間をどう過すかであった」と釈明したうえで、「新しい用紙を取ってくる間、これに回答しているように」と質問紙を手渡した。そのとき、もう1人の被験者(女性のサクラ)がやってきた。彼女は実験条件に応じて、①車椅子、或いは②普通に歩いて実験室にやってきた。

実験者はサクラにも同様の質問紙を手渡して、「私が戻ってくるまで、

これに回答しているように」告げて退出した。その間にサクラは頃合を見計って次の条件操作を導入した。

① Request mention 条件……サクラは鉛筆の芯を折ってしまい、どうしたものかと周りを見まわしているときに鉛筆削に気づき、被験者に向かって、「すみませんが、鉛筆をけずっていただけませんか。高い所に置いてあるので私には手がとどかないのです」と頼んだ。被験者が何らかの返答をしたときに実験者が戻ってきた。そしてサクラの鉛筆の芯が折れていることを確認したうえで、新しい鉛筆と取りかえてやった。

② Relevant request 条件……サクラは「すみませんが、鉛筆をけずっていただけませんか」とだけ言った。その他は Request mention 条件と同じである。

③ Irrelevant request 条件……サクラは「すみませんが、あそこにある鉛筆を1本とっていただけませんか」と頼んだ。その他は Request mention 条件と同じである。

④ No request 条件、⑤ Nondisabled 条件では、いずれもサクラは実験者が戻ってくるまで黙って質問紙に取り組んでいた。

実験者は戻ってくると、被験者を別室に案内し、改めて「18分間をどのように配分するか」の判断を求めた。同時にサクラについての印象評価も行なうように依頼した。

(結果) まず最初に第1回目の12分間の時間配分に関して、条件間に有意差のないことが確められた。次いで第1回目と第2回目の時間配分の単位を調整するために前者を1.5倍した。従属変数は social interaction (サクラと一緒にいること)を好む度合に変化が生じたかどうかであった(表4)。

その結果、Request mention 条件と No request 条件の間及び No request 条件と Nondisabled 条件との間で有意差が見出された。一方、サクラに対する印象評価については、条件間に有意差が見られなかった。

表4. Social interaction を好む方向への変化

条 件	人 数	平 均 値
Request mention	15	+1.60
Relevant request	15	+0.63
Irrelevant request	13	-0.50
No request	15	-0.73
Nondisabled	13	+1.11

以上の結果から次のことが指摘された。①一般にスティグマを負った人 (disabled person) との接触を回避する傾向がみられること、②そうした傾向は両者の間での情報不足による所が大きいことから、スティグマをもつ人が進んで自らの負い目に言及することが両者のわだかまりを解消し、相互作用を促進するきっかけになる、と主張された。

Bullman & Wortman の研究

自らの一生を変えてしまうような事故や災難に遭遇した人びとは、それをどのように受けとめて対処しようとしているのであろうか。症状の重さ、その間の経緯、責任の所在などによって各人の対応の仕方は異なってくるであろうが、いずれにしても何らかの形で自らの立場を意味づけることが必要となる。

この点について、Bullman & Wortman (1977) は自動車事故、ダイビングの失敗、銃砲の取扱いミスなどによる脊髄損傷のため、両足が麻痺 (paraplegic)、両手両足が麻痺 (quadriplegic) した患者 (合計29名) に対して一連の面接を行なう一方で、ソーシャル・ワーカーや看護婦から彼等のリハビリテーションへの取組み方についての証言をえることにした。

(手続) 面接対象者 (男23名, 女6名) はシカゴにあるリハビリテーション・センターに入院している脊髄損傷患者であり, 事故にあったときの年齢は16~35才, 事故がおきてから1年未満であった.

表5. 面接結果の概要 (平均値と標準偏差)

Interview item	M	SD
How much do you blame yourself for what happened? (0=not at all, 5=completely)	1.897	2.093
How much do you blame each of the following factors for the incident which brought about your present disability? Please assign a percentage of blame to each factor, so that the overall assignment of blame totals 100%.		
{ Self	29.655	35.555
{ Other people	19.310	30.317
{ Environment	17.414	28.959
{ Chance	33.621	35.755
To what extent do you believe you could have avoided what happened? (0=not at all, 5=completely)	2.345	2.040
How happy are you now (not at this moment, but at this stage of your life)? (0=not at all happy, 5=extre- mely happy)	2.963	1.160
Considering the best and worst things that could happen to you in your lifetime, where does your present disability fit into the scale? (0=worst that could ha- ppen, 5=best that could happen)	1.276	1.412
Internal-external locus of control scores	10.966	4.516
Just World scale scores	.522	19.575
Religiosity scale scores	87.607	18.381
In your opinion, how well has the patient coped with his or her disability? (1=has coped extremely poorly, 15=has coped extremely well)		
Social workers' responses	6.931	3.184
Nurses' responses	7.448	3.397

面接者は予め本人の同意をえたるうえで病室または面会室で約1時間の個人面接を行なった。面接ではデモグラフィックな変数についての情報、RotterのI-E scale, Rubin & PeplauのJust world scale, Poppleton & PilkingtonのReligious attitude scaleの施行、事故についてどう考えているのか、今後の見通しといったことに関する回答がえられた。

一方、これにあわせてソーシャル・ワーカーや看護婦から「患者がどの程度リハビリに真剣に取り組んでいるか」についての評定がえられた。

(結果) 面接結果の概要は表5に示した通りである。

それによれば、①その事故は避けることができたと考えていたり、非難すべき相手がいなかったり、当人の信仰心があつい場合には事故の責任を自分自身に帰属する傾向が強くみられること、②事故がおきてからの時間の経過はその責任を環境要因に帰属させる傾向を強めること、が明らかにされた。またリハビリテーションへの取組み(coping)については、③他者を非難する度合が強かったり、事故は避けることができたと思っっている間は、リハビリテーションに取り組む姿勢にもどこか甘さがあり、真剣さが感じられないこと、④逆に自分自身を非難する度合が強ければ、リハビリテーションにも真剣であること、が示された(表6)。

表6. 責任の帰属とリハビリへの取組み方

Perceived avoidability	Poor Copers		Good Copers	
	Low self-blame	High self-blame	Low self-blame	High self-blame
High	5	4	0	5
Low	4	1	5	4

さらに、「何故、あなたがこのような目にあわなければならなかったか」という質問に対する回答は(重複回答を含む)、①神様が決められたこと

(10名), ㊸偶々それが私におきただけのこと(8名), ㊹そのように運命づけられていたこと(7名), ㊺自らの生き方を問い直す機会を与えてくれたこと(6名), といった内容のものが上位であった。

以上の結果から, ㊶事故は避けられなかったと考えており, しかも自らの非を認めている人の場合には立ち直りの意思も強く, 予後も良かったこと, ㊷こうした傾向は自分から進んで参加したレジャー活動による事故であった場合の患者において強く見出されたこと, などが指摘された。

スティグマを生みだす心理過程

スティグマを負った人との相互作用が回避される理由として, これまでにも㊶彼等との出会いが人びとを不安に陥れるためとか, ㊸彼等との出会いが自分たちも同じような目にあってもおかしくないことを人びとに認めさせる結果となり, これまで信じてきた「人びとは自らの行為に相応しいものを受けとる」といった世界観 (a belief in a just world) が根底からくつがえされてしまうため, といった説明がなされている。たとえば, 自業自得として逆にスティグマを負った人の責任を追求したり, 彼等を手厳しく中傷し誹謗するといった行動は後者の理由によって説明される。

しかしながら, Langer, Fiske, Taylor & Chanowitz (1976) はこうした回避行動をスティグマを負った人に向けられる好奇の目 (desire to stare) とそれを不躰なこととして禁ずる社会規範 (desire not to stare) との葛藤から説明する「新奇刺激仮説 (novel-stimulus hypothesis) を提唱した。彼等によれば, この種の葛藤がもたらす不快感は, ㊶そうした場面からの完全な撤退から, ㊸最小限度の接触にとどめる, といった範囲での行動となって見出されることになる。

彼等はこの仮説を検証するために, 相手を凝視することを禁じた社会規範の働きが相対的に弱い写真を刺激として用いることとし, このような状

況ではスティグマを負った人の写真を凝視する時間は普通の人の写真の場合よりも長くなるであろうと予想した。実験結果は仮説を支持するものであった。しかし身体的ハンディキャップを負った人を中傷するといった現象は見出されなかったことから、スティグマの問題を論ずる際にはこれらの人びとと犯罪者や精神病者を区別することが必要であると主張した。

一方、Katz, I. (1981) は人びとが身体的ハンディキャップをもった人に対して示す反応は、①友好、同情、受容といった感情と、②敵対、中傷、拒否といった感情が入りまじったアンビバレントなものであり、両者が拮抗する度合が強ければそれだけ、どちらか一方への極端な反応となって出現するという仮説 (ambivalence-induced behavioral amplification) を提唱した。

たとえば、こうしたアンビバレントな状態は人びとの意思決定を遅らせることになるであろうとの仮説に基づき、予め被験者に①車椅子を使用せざるをえない人、②異常に太った人、③非常に背が高い人、についての好意度の評定を求めた上で、改めてこれらの人びとの何割が実験者の提示する属性 (ポジティブとネガティブな属性を5個ずつ) を有しているかを推測するように要求した (所要時間を測定)。最後に各条件群に対して、異なる面接記録の一部を手渡して (Handicapped-positive 条件, Handicapped-negative 条件, Nonhandicapped-positive 条件), 被面接者の印象評価を求めた。

実験結果は ambivalence-induced behavioral amplification 仮説を支持するものであり、「身体的ハンディキャップをもつ人びとの何割が各属性を有するかの推測に要した時間の長さは (アンビバレンスの強さを示す), Handicapped-positive 条件での好意的評価, Handicapped-negative 条件での否定的評価と強い相関をもつことが示された。また同様な傾向が肥満の人の場合にも見出された (表7)。

さらに異なる文脈のもとでの研究ではあるが、Linville & Jones (1980)

表7. 各評定条件における反応潜時と好意度

	Target groups		
	Disabled	Obese	Tall
Latency	39.19	36.82	35.41
Favorability	6.14	1.23	5.54

Note: N=101 for all groups

は外集団 (out-group) と内集団 (in-group) のメンバーではその評価が異なることを指摘した。すなわち、①人びとの認知図式 (schema) は外集団に対する場合よりも、自分が所属する内集団の方がより複雑となっていること、②その結果として、外集団のメンバーに対する評価はより極端なものとなりやすいこと、③たとえば、同じような好意的な情報が与えられたとしても、外集団のメンバーに対する評価は内集団の場合と比べて、よりポジティブなものとなり、否定的な情報が提示された場合にはよりネガティブな方向に傾きやすいこと、を明らかにした。

こうしてみると、スティグマを負った人に対するネガティブな評価の形成は、認知図式の発達が不十分な所へ、否定的な情報が数多くもたらされたためとも考えられる。

ところで、スティグマを負った人と一般の人びととの心理的距離を短縮し、好ましい形での相互作用を促進することは可能であろうか。

この点について Scheier, Carver, Schultz, Glass & Katz (1978) はスティグマを負った人に関する個人的な情報の提示 (personalization) が好意的な評価をもたらすことを指摘しており、Lerner & Miller (1978) は彼等との同一視が中傷や誹謗といった行動を減少させると述べている。しかしながら、スティグマという問題がスティグマを付与する者と付与される者といった社会関係の在り方と強く結びついている以上、その解決にあたっての個人的努力には限界のあることは明らかである。今後は外集団一

内集団，多数派集団—少数派集団といった形での集団間の関係と，個人行動との係わりについての研究が必要と思われる。

引 用 文 献

- Belgrave, F. Z., & Mills, J. 1981 Effect upon desire for social interaction with a physically disabled person of mentioning the disability in different context. *Journal of Applied Social Psychology*, 11, 44-57.
- Bullman, R. J., & Wortman, C. B. 1977 Attributions of blame and coping in the "Real world": Severe accident victims react to their lot. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 351-363.
- Carver, C. S., Glass, D. C., & Katz, I. 1978 Favorable evaluations of blacks and the handicapped: Positive prejudice, unconscious denial or social desirability? *Journal of Applied Social Psychology*, 8, 97-106.
- Comer, R. J., & Piliavin, J. A. 1972 The effect of physical deviance upon face-to-face interaction: The other side. *Journal of Personality and Social Psychology*, 23, 33-39.
- Dienstbier, R. A. 1970 Positive and negative prejudice: Interactions of prejudice with race and social desirability. *Journal of Personality*, 38, 198-215.
- Farina, A., Holland, C. H., & Ring, K. 1966 Role of stigma and set in interpersonal interaction. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 71, 421-428.
- Farina, A., Sherman, M., & Allen, J. G. 1968 Role of physical abnormalities in interpersonal perception and behavior. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 73, 590-593.
- Goffman, E. 1963 *Stigma: Notes on the management of spoiled identity*. Prentice-Hall.
 (石黒 毅訳 スティグマの社会学—烙印を押されたアイデンティティー。せりか書房。1984)
- Hastorf, A. H., Wildfogel, J., & Cassman, T. 1979 Acknowledgment of handicap as a tactic in social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1790-1797.
- Jones, E. E., Farina, A., Hastorf, A. H., Markus, H., Miller, D. T., & Scott,

- R. A. 1984 *Social stigma: The psychology of marked relationships*. Freeman.
- Katz, I. 1981 *Stigma: A social psychological analysis*. Lawrence Erlbaum Associates.
- Kleck, R. E. 1968 Physical stigma and nonverbal cues emitted in face-to-face interaction. *Human Relations*, 21, 19-28.
- Kleck, R. E., Ono, H., & Hastorf, A. H. 1966 The effects of physical deviance upon face-to-face interaction. *Human Relations*, 19, 425-436.
- Kleck, R. E., & Strenta, A. 1980 Perceptions of the impact of negatively valued physical characteristics on social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 861-873.
- Langer, E. J., Fiske, S., Taylor, S. E., & Chanowitz, B. 1976 Stigma, staring and discomfort: A novel-stimulus hypothesis. *Journal of Experimental Social Psychology*, 12, 451-463.
- Lerner, M. J., & Miller, D. T. 1978 Just world research and the attribution process: Looking back and ahead. *Psychological Bulletin*, 85, 1030-1051.
- Linville, P. W., & Jones, E. E. 1980 Polarized appraisals of out-group members. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 689-703.
- Mills, J., Belgrave, F. Z., & Boyer, K. M. 1984 Reducing avoidance of social interaction with a physically disabled person by mentioning the disability following a request for aid. *Journal of Applied Social Psychology*, 4, 1-11.
- 三井 宏隆 1985 Bogus pipeline について. *実験社会心理学研究*, 24, 167-173.
- Scheier, M. F., Carver, C. S., Schultz, R., Glass, D. C., & Katz, I. 1978 Sympathy, self-consciousness and reactions to the stigmatized. *Journal of Applied Social Psychology*, 8, 270-282.
- Snyder, M. L., Kleck, R. E., & Strenta, A. 1979 Avoidance of the handicapped: An attributional ambiguity analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 2297-2306.